

## 関西学院にとっての聖和史②

### 西宮聖和キャンパスの由来

原 真 和

(聖和短期大学教授、聖和史編纂委員会委員長)



2009年4月、学校法人聖和大学が学校法人関西学院に合流したことによって、西宮聖和キャンパスが、新たに関西学院のキャンパスとなりました。

岡田山の西宮聖和キャンパスは、1932年、神戸女子神学校（会衆派）の新しいキャンパスとして始まりました【右上は岡田山移転後の神戸女子神学校のシンボル】。当時のキャンパスは、現在のダッドレーチャペル（4号館）、5号館、6号館の辺りのみで、校舎（現ダッドレーチャペル）、寄宿舍（旧5号館、現存せず）、宣教師館（後に聖和幼稚園園庭付近に移築、現ゲーンズハウス）、日本人教師住宅（現存せず）の4棟がありました。1941年、大阪のランバス女学院（メソジスト派）が神戸女子神学校に合流し、聖和女子学院となりました。それが「聖和」という名前の始まりです。戦後、米国メソジスト教会婦人部等からの援助もあり、隣接地を順次購入。旧1号館（1952年）、旧講堂（1955年）、旧学生寮（1961年、現10号館）等が建設されました。その後さらに隣接地等が購入され、新しい校舎等が建設され、現在の姿となっています。



神戸女子神学校は、1880年、ダッドレー（Julia Elizabeth Dudley, 1840-1906）とバローズ（Martha Jane Barrows, 1841-1925）によって、神戸の花隈で始められました。それを支えていたのは、アメリカン・ボード（American Board of Commissioners for Foreign Missions）の中部婦人伝道会（Woman's Board of Missions of the Interior）でした。神戸女子神学校は、コザード校長（Gertrude Cozad, 1865-1949, 校長在任 1901-1926）の時に、神戸の中山手通 59 番のキャンパスに新校舎を完成させ（1908年）、充実期をむかえました【写真は1910年】。その校舎内にあったチャペルは、ダッドレー記念チャペルと命名されました。初代のダッドレーチャペルです。その建物は現存しませんが、厚い木の板

のプレートが残っています。それには、“Julia E. Dudley Memorial Chapel/1840-1906/1873 In Japan 1900”と刻まれています。

神戸女子神学校は、1922年、憲法を制定し、理事会を設置しました。アメリカン・ボードだけでなく、同窓会や日本組合基督教会からも理事を出し、9名によって理事会を構成しました。その背景としては、女性宣教師養成校の経営に、ひいては日本の宣教に、日本人がもっと関わっていくべきであるという気運があったと考えられます。そのような中で、1926年、米国の中部婦人伝道会からの補助金が約3分の1に減額されました。その背景としては、東部、中部、太平洋に分かれていた婦人伝道会が1つに統合されることになったところ、中部婦人伝道会には約33,000ドルの赤字があり、統合前に赤字を解消することが課題となっていたということがあったと考えられます。1927年、神戸女子神学校、頌栄幼稚園・頌栄保姆伝習所、その他の経営が、アメリカン・ボードから、アメリカン・ボードと日本組合基督教会の共同経営となり、中央委員会が設置されました。それに伴い、神戸女子神学校理事会は管理委員会となりました。

アメリカン・ボードの財政問題は如何とも難しく、神戸女子神学校の存続は困難であると考えられました。頌栄保姆伝習所との合同案や神戸女学院との合同案が検討され、ある程度進められましたが、中止となり、閉校して青山女子神学部へ合流する案や同志社神学部と提携する案等が議論されました。しかし、1930年5月の中央委員会の結論は、頌栄幼稚園・頌栄保姆伝習所を中山手通 59 番に移し、神戸女子神学校は、神戸女学院と関西学院の付近に移し、カリキュラムを改善して、存続させるというものでした。関西学院は、1929年3月に上ヶ原への移転を完了させていましたし、神戸女学院は、1930年3月、旧尼崎藩主櫻井子爵家の別邸約20,000坪を購入し、岡田山への移転を決めていました。（神戸女学院は、さらに隣接地を甲東村

村長松本長右衛門氏から購入して、34,000坪余のキャンパスとしました。)

上記の中央委員会の決定に基づいて、神戸女子神学校は、神戸女学院の隣接地約 1,000 坪を購入しました。1932 年 1 月末、中山手の校舎とのお別れ会が催されました。岡田山の新校舎は、関西学院や神戸女学院と同様、ヴォーリズ建築事務所が設計、竹中工務店が施工しました。1932 年 6 月 3 日に定礎式が行なわれ、10 月に移転。1933 年 3 月 28 日、新校舎の献堂式が盛大に行なわれました。関西学院のベーツ院長や神戸女学院のデフォレスト院長も出席し、祝辞を述べています。



岡田山の新校舎について、長坂鑿次郎教頭は、「美しい校舎だ。美しい寄宿舎だ。勿体ないようだ。風景も美しい。あたりは静かだ。祈りによく、勉強によい」と述べています(『神戸女子神学校同窓会会報』第 20 号、1933 年 6 月)。長坂によると、ただ単に美しく、静かであっただけでなく、様々な人たちが集まる場所でもありました。村の子どもたちを招いて日曜学校を始めたところ、150 人も集まりました。村の女性たちや寺の住職も、ウィルソン校長【写真】に招かれて、宣教師館にやって来ました。日曜日の夜に幻灯を使った集会を催したところ、神戸女学院の工事に携わっている労働者たちが大勢やって来ました。彼らの娯楽や読書のために、週に 2 回、校舎を開放しました。求道者会や家庭バイブルクラスも始まりました。

1930 年 5 月の中央委員会の決定に含まれていたカリキュラムの改善は、社会事業科の新設として具体化されました。神戸女子神学校の専任教員として社会事業科の科目を担当したのは、赤い羽根共同募金運動の提唱者として知られている竹内愛二【写真】でした。竹内は、当時の様子を次のように記しています。「関西学院へは私の脚で十分です。旧約の松田先生や宗教教育の横田先生など同じ構内のように往復なさる。麦の穰ろうとしている五月の今がこの関西学院と神学校とをつなぐ細道を一番享楽出来る時なのです。同窓生の皆様が、否、誰もがかつて夢にも想わなかったカレッジタウン、大学街、しかも基督教の大学街がこの甲山麓の斜面に現出しようとしています」(『神戸女子神学校同窓会会報』第 20 号、1933 年 6 月)。



当時の学生の中には、韓国で社会事業の先駆者として広く知られている崔容信(チェ・ヨンシン)がいました。崔容信は、1934 年 4 月に神戸女子神学校の社会事業科に入学しましたが、健康がすぐれず、半年で帰国しました。帰国後、農村社会運動に身を投じましたが、1935 年 1 月、26 歳で亡くなりました。彼女の生涯は、沈熏(シム・フン)によって『常緑樹(サンノクス)』という小説になり、後に映画になりました。韓国では社会福祉に貢献した女性に容信奉仕賞が毎年贈られています。韓国の安山市には崔容信記念館があります。

日曜日、神戸女子神学校の学生たちは、それぞれの教会に行き、奉仕しましたが、午後には寄宿舎に帰ってきました。キャンパスが町から山に移り、女性の夜の外出は難しくなったと思われました。そこで夕礼拝が行なわれるようになりました。厳粛な沈黙。誰一人話などせず、黙祷して開始を待ちました。感動的な讃美歌、長坂の詩的な説教と祈り。終わりの歌の後も、会衆の黙祷が続きました。この静けさを慕って、関西学院や神戸女学院の学生や職員がやって来ました。その中に関西学院大学商経学部 3 回生緒方純雄がいました。緒方先生は同志社大学大学院神学研究科における私の恩師です。

1940 年の秋以降、神戸女子神学校とランバス女学院をとりまく経営環境が急変し、単独での存続が困難となり、両校は合併を模索し始めます。

参考文献：竹中正夫『ゆくてはるかに：神戸女子神学校物語』(教文館、2000 年)

